

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

三浦梅園の自然哲学：『玄語』初稿本の成立とその意義

村上，恭一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

46

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

14

(発行年 / Year)

1983-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005322>

三浦梅園の自然哲学

——『玄語』初稿本の成立とその意義——

村上 恭一

序

三浦梅園(享保八年——寛政元年、一七二三—一八九)は、若き日に、自然界には一定の法則が支配しているといふことを悟って、自然研究を痛感するにいたり、自然哲学の書『玄語』の第一稿を起こしたと言われている。梅園のときに三十一歳、宝暦三年(一七五三)のことである。このころの梅園の学問的態度については、後年になって書かれた梅園自身の書簡のなかにはしばしば見えている。たとえば、このうち最もよく引かれる書簡には、こう書かれている。「歳二十有九、始めて氣に観る有り。漸く天地に条理有るを知る。是に於て世の天地を説き陰陽を説く、皆痒(かゆ)を靴に隔つるを覺ゆ。嘗つて人と之を誦(たぶ)し意を尽さず。為めに玄語を著はす。草を宝暦癸酉(1758)に起す。」(原漢文)この消息は、梅園の思想的転回というよりはむしろ梅園哲学の出発点を告げているものと言つてよいであろう。というのも、いま言う「歳二十有九」のころまでの梅園の著作としては、わずかに紀行文『東遊草』一卷、未定稿『反故』(後の『梅園叢書』の草稿本)および若干の詩稿を数えるのみであり、しかもこれらの文章からは、如何せん、あの『玄語』の著者独自の思索生活を覗きみることもできなければ、またその哲学的想念の片鱗をさえ嗅ぎ

とることもしないからである。⁽³⁾

三浦梅園は、その年譜によると、元文三年（一七三八）、十六歳にしてはじめて杵築の城下に出て藩儒、綾部綱齋（一六七六一一七五〇）に師事したというのである。綱齋は、生涯寡作にして、いまその学風を窺うに十分足りるだけの著述がないが、わずかにかれの『家庭指南』一卷は、多年にわたって深く程朱哲学を信奉した者の簡潔にして要をえた実践的道德哲学の書と言ってよいであろう。程朱の立場にたつて著者が説くところによると、天地の万物は「命を天よりうけて各々その性とす、これを徳といひ、則といひ、道といふ」と言われる。そして、この点から著者は、親・義・別・序・信の五倫の道理を明らかにしながら、諸生に学問の道を説いている。またかれは、この書のなかで、「一草一木、一物一事、皆その則ありて相悖らざるなり」とも書いている。この則とは、規則・法則・すじみち・自然の条理の謂いである。綱齋は、このような言葉をもちいて、天地万物の生々化育の様相を語っておりながら、そのまま「自然哲学」へ進むことをせず、かえって伝統的な「道德哲学」への方向を選んでいる。こうした傾向は、この時代の儒者の一般の特徴といってもよいが、それはまたこの十七、八世紀の日本において「自然哲学」の書がなぜ多く書かれなかつたかという疑問に対する間接的な答ともなっていよう。梅園は、一方において、このすぐれた倫理書『家庭指南』を多年その私塾においてテキストとして使用し、塾生にこれを講じたと言われるが、しかし前記「歳二十有九」にして開眼したとみられるかれの「自然哲学」への構想は、いよいよ膨大になるに及んで、この点にかんずるかぎり、たとえかれを導いた先師の書ではあれ、かれにとつては「皆痒を靴に隔つるを覚」えるほどであったのかも知れない。たしかに梅園自身、このときの自らの真意を後年知人への手紙のなかでこう告白している。「先生〔綾部綱齋〕に親炙不久候得ども道唯だ彛倫にあるの所深く服膺仕候。条理を取りて天地を大観するに於ては前に不見古人。」

三浦梅園は、真理認識への放浪の果て、ついに「歳二十有九」にして、古人未踏の地でありかつ自らの新しい「自然哲学」の境地、いわゆる△条理学への道を発見した。それは、奇しくも先師綱齋の没した翌年のことだ。さて、本稿においては、いま言う点から、とりわけこの「宝曆三年」のころにみられる梅園の思索過程に注目し

たいと思う。

一 十八世紀前半の日本の自然哲学の動向

梅園が自然哲学的知識の総合と統一を固めようとしていた宝暦はじめのころ、つまり十八世紀中期の日本の自然哲学の状況は、どのようであったのか。(この問いは、同じく安藤昌益の自然哲学に注目するときにも、おそらく意味をもつてあろう。)

いったい日本における自然哲学の成立は、梅園が自然哲学的著述を開始したころの宝暦三年(一七五三)から先行することせいぜい百年を上限として考えるべきで、とてもそれ以上に遡ることはできない。その意味で、十七世紀半に成立したとみられる『乾坤弁説』⁽⁸⁾をまず最初に挙げるべきであろうが、厳密な意味で言えばこの書は、その当時の日本人の創見によるものではなく、西洋人の手に助けられた訳述書であることを考慮にいれるならば、右の上限はもっと下ることになる。日本の自然哲学の歴史は、そんなにも日が浅く、心許ないのである。梅園が、自然の本性あるいは自然現象というものを、条理をつうじて(論理的に)考察しようとする自然哲学的試みに立つとき、「前に古人を見ず」と半ば豪語したのも、いま言うような点から考えれば、もっともなことではある。さは言え、梅園以前に、旧態依然たる従来の学問のあり方に疑問をいだき、新しい学問的態度を表明しようと試みた学者が、まったく現われなかったわけではない。まず、天文学の分野では、西川如見⁽⁹⁾(一六四八—一七二四)を、医学の分野では、後藤良山⁽¹⁰⁾(一六五三—一七二七)、山脇東洋⁽¹¹⁾(一七〇五—一六二)、吉益東洞⁽¹²⁾(一七〇二—一七三)などを挙げることができる。またもっと広い意味で、独自の自然哲学をもつて、自然観察を提唱しかつ実践した者として、まず第一に貝原益軒(一六三〇—一七一四)を挙げるべきかも知れない。その『大和本草』⁽¹³⁾は、動・植物・鉱物等にかんする百科全書的大著であるが、この書に付した序文こそ、実は益軒の「物理論」であり、十八世紀初期の日本における数少ない自然哲学の文献に数えることができるであろう。またこの書の本文(全十六卷)は、実に日本博物学史において先駆的業績をなすものとみられる。やや目を転ずれば、観念論哲学としての朱子学の批判を

つうじて、自然哲学的傾向を示す氣一元論への道を開いた山鹿素行（一六二二—一八五）とか、この氣一元論の唯物論的哲学を提唱した学者として伊藤仁斎⁽¹⁴⁾（一六二七—一七〇五）までも挙げる事ができよう。ただし、仁斎の自然哲学は、純粹に自然觀察に依拠したところの氣一元論の哲学ではない。これらのなかでは、益軒の立場が最もよく自然觀察にもとづく學問的態度を表明しているが、その益軒でさえ、自然觀察を自らの學問全般の特質とするほどには徹底していないと言つてよい。すなわち、益軒の自然哲学は、その方法論の点において、まだ一貫性を欠いているようにみえる。

三浦梅園が、若き日に、自然哲学の方法論的開拓に没頭していたその当時の日本の斯界の状況は、いまかいつまんで展望したとおりである。それは、小窓をとおして垣間見る大空の一角にすぎぬほどの情報でしかないが、それでも当時の日本の自然哲学のゆるやかな動向を探り当てる手掛りにはなろう。

そうしてみると、十八世紀日本における自然哲学の方法論の確立と學問的自覚が、はっきりと認められるようになるのは、實際、三浦梅園からであると確言してよさそうである。すなわち、この意味では、梅園はわが国における自然哲学の先駆とみなすにふさわしい哲學者ではある。

なお、これは後年ようやく学なつたときの梅園の言葉であるが、同時代の学界の状況にもふれながら、ここではこう書かれている。——「それ、人は天地〔自然〕を宅とし居るものに候へば、天地〔自然〕は學者の最先講すべきことに御座候。尤、天文地理〔の學問〕、天行の推歩〔天体の運行を觀測して曆を作成する技術、曆学〕は、西洋〔西洋の學問〕入候て、段々精密にいたり候へども、それはそれ切りにして、天地の条理〔自然の論理構造〕にいたりては、今に徹底と存ずる人も承らず候。」⁽¹⁵⁾

この文章からも察せられるように、自然を根拠とし条理に従つてこの自然から根本原理を歸納すべきことを説く梅園の思惟方法が、終始一貫してかれの自然哲学的著述をつらぬいてると言つてもよい。それゆえ、常に「天地〔自然〕を師とする」この哲學者にとっては、まずは自然にてらしてみ合致するものだけを採用し、自然にてらして誤りと判るものはすべて捨て去るべきだとされる。だから、「傍書籍に参考し、あはざる處を置き、あふ處

をとるべし」と言われるのである。

梅園の自然哲学は、その揺籃期のものからして氣一元論の立場にたつとともに、なによりも科学的精神によって貫かれているとも言える。梅園の長子黄鶴の記述になる「先府君學山先生行状」⁽¹⁸⁾や、その他の書にも記されているように、梅園は幼時のころから思索に長じ、懷疑的精神が旺盛であったということである。⁽¹⁹⁾こうして梅園のうちに生来恵まれた哲学的素養が、日常の自然的なものの方とか習慣を排除するとともに、いっさいを疑うことをもって哲学をはじめなければならぬとする梅園哲学の方法論として、結実したとみることができよう。

二 梅園の自然哲学の成立

あまねく知られているとおり、梅園畢生の自然哲学の労作『玄語』は、最初、「宝曆癸酉」に起草されたその第一稿では、『玄論』⁽²⁰⁾と命名され、次いで『元氣論』⁽²¹⁾（この表題のもとで三度改稿）、さらに『垂綸子』⁽²²⁾（この表題のもとでは五度改稿）と改題され、その第十稿にいたってようやく『玄語』と定まったもので、当初より二十三年を要して換稿また二十三回をへて、ついに安永四年（一七七五）に完成したのである。⁽²³⁾

梅園は、前述のとおり、天地に条理があることを悟って『玄語』の稿を起したのであるが、かれの飽くなき思索過程において、この書は、また前記例旨に言うように、形式的にも内容的にも夥しく改訂、増補されることとなった。したがって、この書の初稿本は、梅園自身の言葉によると、「一七五三―六五年までに」換稿十五。竟に大いに慣々たるを覚え、尽く旧稿を棄てて新に起草す」とあるところから、その思索過程のなかで否定され廃棄されたことになる。しかしながら、梅園が「歳二十有九」にしてはじめて「有観于氣」と自覚して辿りつきえた「一元氣」の哲学的境地そのものが、ここで否定されたのではない。否むしろ、この氣の哲学こそ、梅園の自然哲学全体を終始つらぬくところの根本思想ですらある。それゆえ、これを弁証法的に言えば、『玄語』初稿期における梅園の思想は、安永四年以降の後期の梅園哲学のなかに否定的に統一され、保存され、かつ高められているということができるであろう。梅園自身、『玄語』起稿の年から数えて実に十二年目の明和二年、つまり『玄語』換稿第二

期のころに執筆されたものとみられる稿本の凡例に、初稿期のものとまったく同様に「宝曆癸酉」と記しているところから察するの⁽²⁴⁾に、これこそ実に、著者が自らの哲学の出発点に対して思いのほか深い意義と大いなる感激を後年まで抱いていたことを例証するものと言ってよからう。筆者が、ひとたび弁証法的に止揚されたところの『玄語』初稿の思想のうちに、むしろ積極的に意義を認めようとするのも、実はいま言うような点を考慮してのことである。ところで、『玄語』初稿の思想を知るにあたって、まず第一に注目しなければならないのは、『元炁論』ないしは『垂綸子』であろうが、ここではさしあたって『元炁論』を中心にその一、二の問題を考察することにする。

この書は、前述したように、第一稿『玄論』の改訂本である。そして、その内容として、つぎのような項目が配列されている。すなわち、「一元氣」、「空」、「天地」、「陰陽」、「寒暑」、「水火」、「物氣」、「機」、「教」、「生化」、「自然而然」、「命」——以上の十二章である。

この書は、序言に類するものもなく、まずその冒頭から一元氣を論ずることをもってはじめられており、しかもこの立場が書中終始つらぬかれていますという点からして、 Δ 一元氣の宣言の書 ∇ と言ってもよい。このことを指して書いたとみられるあの「有観于氣」という梅園の言葉のうちに、われわれは、一元氣の哲学的境地を発見しえて感激したのであろう若き日のこの哲学者の心中を十分推察することができる。ところで梅園は、如何にしてこのような境地を見出しえたのだろうか。「前に古人を見ず」とかれは言っているが、この初稿の成立当時にかれの読んだ書物が、かれにとって、いささかなりとも考えるヒントになったであろうことは十分ありうることである。『浦子手記』⁽²⁵⁾によると、延享三年（一七四六）梅園二十四歳のとき、『天経或問』⁽²⁶⁾を読み、さらに寛延二年（一七四九）二十七歳にして『理学類篇』⁽²⁷⁾を読んだことが窺えるが、このことはとりわけ注目されてよいであろう。なお、梅園の思索過程のうえに少なからぬ影響をもたらしたとみられる文献のひとつに、明末清初の思想家・方以智（一六一一—一七一）の『物理小識』⁽²⁸⁾（一六三二）があるが、十七世紀の中国の自然哲学史のなかでもひとつの新しい地位を占めるとみられるこの文献を、梅園がいつ閲読したかについては確証をえない。⁽²⁹⁾ここでは、ただひとつの目安として、梅園が二十四歳のときに閲読した『天経或問』の巻頭の「引用書目」のうちに、方以智の書『通雅』『物理小識』

が挙げられているところから察するに、おそらく梅園はかなり早期にして、この書の存在を認識していたのではないかと、という憶測を付記するにとどめておく。

三 一元氣論の哲学

(1) 一元氣 さて、『元蒸論』の冒頭の言葉、——一元氣とはなにか。梅園は、つぎのように書いている。

「名づけやすからざる者あり、暫くかつて一元氣といふ。一元氣、宇宙に充満して、秋毫の末をものこさず、よくわかちよくあはせ、生々化々して、端倪をみず。天外をつゝみ、地内にやすんず。然して「兆朕をみざるの始より、万象森羅たるにいたる迄」、必対あるものは自然なり。天は極て大にして、地は至て小なり。地、天に比すれば、「微塵なりといへども、天地相依てたつ。地は天の正中に在て、〔持して〕動かす。天は地をつゝんで、暫くも〔転ず〕る事をやめず。是誰かなす処ぞや。」

かつて張載は、氣一元論の哲学を提唱したが、それによると、あらゆる物質の原質としての氣が万物を生み出すということ——すなわち、氣は太虚にあたかも空中の塵埃のように際限なく上昇・下降しつつ飛翔して、宇宙の万物を生み出すということだ。また、「太虚は形なく、氣の本体なり」と言われる。つまり、太虚と氣は互いに相即して一なるものであり、したがって、氣がなければ太虚もないことになる。言いかえると、際限なく運動している氣が聚つて万物を形成し、万物はまた散じて太虚となるということだ。張載は、このような氣(太虚)の一元論的宇宙論を展開したのである。

若き梅園が、今一元氣の宣言の書としての『玄語』初稿本を構想していたとき、果たしてかれの脳裡には、いま言うような張子の氣一元論の哲学が去来していたのであろうか。

いったい宇宙には、規定しようのないもの・何とも区別しようのない渾沌たるものが充満している。それは、無規定的なものとしか言えない。だが、もっと強いて言わんとすれば、名づけたいが暫く仮りに一元氣と言っておこう。そして、この一元氣なるものが宇宙に充満して、しかもいささかの間隙もなくあらゆるところに浸透して

いて、それが絶えず生々化育して万象を生み出すのである。この自然的営みには、始めとか終りというものがなく、したがってこの活動は休息することがないのであり、ただ果てしなく聚散離合を繰り返すだけだ——これが、一元氣の意味するところである。

「天地の間に盈つるは皆物なり。…天地を通觀するに、天地も一物なり。」(原漢文)と、かつて方以智は言ったが、いまここに目を転ずれば、この一元氣のほかに天地があるのではないということだ。そこで、天地の間には、他ならぬこの渾沌とした一元氣の間断なき聚散生化の活動があるだけだということになる。ところで、天地はその一方だけで存立することはできない。天は大なりと言われるが、一方の小なる地がなければ、その大なる天もそれだけでは存立しえないのである。天地は、このように互いに他方を予想し依拠しあつてこそ存立するものとみられる。天地は、本来、一なるものとして區別されるべきものではないにもかゝらず、一方では天として地として二つの対立する關係におかれてもいる。本来は一でありながら、二として相對、「立」することになるのも、「自然の理」と言うべきであろう。梅園は、この箇所自ら注釈してこう書いている。「日天地、日男女、日生死、日禍福、行として此對をのがるゝものなし。」

一であるものが、天地(二)として対立することになるが、この天地の対立關係をみるのに、地(小)は天(大)の中心にあつて至静で寂然不動であるのに対して、一方天(大)はこの地(小)をつつんで片時も運轉することを止めないのである。こういった天地の動静を引き起こしている原動力とは、いったい何であろうか。これこそ、一元氣の作用を措いて他にはないであろう。ここにいたつて、まず一元氣の概念からはじめて、つぎに一と対立(二)の問題、それから運動(動と静)の概念が提示されたことになる。

(2) 陰陽 つぎに、これまた後期の梅園哲学の根幹となる陰陽の説について、ここではこの初稿本にみられる範圍内で考察することにしたい。

梅園はこう書いている。

「天地の氣、即陰陽の氣なり。象形よりして、天地の氣といひ、往来進退よりして、陰陽の氣といふ。」

前述したように、天地と言っても、一元氣のほかにあるものではないということだ。そこで、この一元氣が対立関係においてみられるとき、それは天地の氣と言われ、また陰陽の氣と言われる。つまり、この両者は、ともに一元氣であるかぎり、同一的ないしは相即的であるから、「天地の氣、即陰陽の氣なり」と言われるゆえんでもある。そして、この同一のものが、象形（あらわれた形）という点からみれば、「天地の氣」と言われるのであり、往来進退（はたらき）という点からすれば、「陰陽の氣」と言われることになる。

陰陽の章の冒頭には、こう書かれている。

「陰陽は一元氣の用をなす処なり。陽氣は熱して明なり。陰氣は寒してくらし。二氣つねに往来進退してやま⁽³⁵⁾ず。」

陰陽は、一元氣の作用的側面をいうのであるが、この作用とは、進退往来というかたちでおこなわれる。明暗寒熱というのも、実は一元氣の作用するところであるから、いま陰陽二氣に分ちて言う場合、陽氣は明熱であり、陰氣は暗寒であるとされる。この陰陽二氣は、もとより一元氣にはかならないから、その作用は、「陽一分を進れば、陰一分を退く。陰一分を退れば陽一分をすむ」というかたちで、つねに進退往来して止息することがないのである。たとえば、明となり暗となると言うのも、実は陰陽二氣の進退往来であるから、陽が進めば明となり、逆に陰が進めば暗となると言うことである。この明暗は、そのいずれが主であり、いずれが客であるかと言うのに、明暗はもともと一氣であるから、主客の区別はありえないのである。すなわち、明暗はその一方を去れば他方もまたなく、相対にしてはじめて一なるものと言うことができよう。

この明暗の進退について、梅園は自らつぎのように注釈している。

「陽氣はつねにすむがごとく、陰氣はつねに退くがごとし。暗中に火を点ずるや、明すんで四方をてらす。暗退ひて四辺にさくることがとし。暗はすんで明の分に入事能はず。明はすんで暗の分に入。しかれども、明一分を減ずれば、暗一分をます。豈よく全くすまざるものなからんや⁽³⁶⁾。」

このところから推察しうることは、日は陽氣の寓するものであって、この日の遠近によって寒熱を生ずるのであ^(寒熱)

り、また目のいたるところ明、日影のいたらざるところ暗であるから、ここに陰陽二気の何たるかを知ることができるといふことだ。

すでに述べたように、一元気は気における最高の概念であるから、それ自身対をもたないのであり、その意味で一者であると言われる。しかし、「対あるものは自然なり」と言われるように、その点では、むしろあらゆるものは、すべて相對「立」するとみられる。すなわち、有無動靜明暗直門というこの相對(二)は、陰陽と言われるわけだ。このような想念を基盤として、『垂緇子』においては、「一者は一元気なり。二者は陰陽なり」と表現されることになる。

結びにかえて

梅園の労作『玄語』の初稿本は、著者の若き日に「有観于氣」との自覚のもとに構想されたものである。まずは、一元気という無規定的なものが宇宙に充塞していて、しかもこの一元気自身の聚散離合のはたらきによって、万物が生々化々する。やがて、この無規定的なものが限定されて、相對の形式をとる。すなわち、象形からみて天地、作用からみて陰陽の對立があらわれる。これらの働きをつねに貫いているものこそ、一元気の作用にほかならない。ここでは、若き梅園のこのような一元気論の独自性を、とくに十八世紀前半の日本の自然哲学との関連のなかで把握しようとして試みた。それゆえ、はじめ本稿において扱はずでありながら、果たせなかつた『元炁論』全体の構造およびその内容の検討については、他日を期したい。

注

- (1) 『玄語』(安永四年、一七七五)の例言には、こう書かれている。「宝曆癸酉の歲(宝曆三年、一七五三)、晋年三十一、肇めて此の編を草す」云々。——『梅園全集』(弘道館、大正元年)上巻所収、一六ページ参照。
- (2) 「高伯起に復する書」(『贅語』附録)、右『梅園全集』上巻所収、六六四ページ。
- (3) 三浦梅園遺言状と言われる「覚」には、こう書かれている。「東遊草・董蒙筌など申す類、みな甚だおろか成る物にて、

他出無用に候。——大分県史料刊行会編纂『大分県史料』⁽²⁾「先賢資料一」(昭和三十五年)所収、二二八ページ参照。

(4) 正徳四年(一七一四)、綾部綱斎三十九歳のときの著作。室鳩巢の跋文(享保九年)、伊藤東涯の跋文(同十年)、および中井竹山の跋文(安永九年)が付せられて長らく筐底に秘められてあったこの著作に対して、梅園がさらに序(天明五年)を付して上梓した。漢文・和文の二本が残存している。(『梅園全集』下巻所収、八二九—四三ページ参照)

(5) 『梅園全集』下巻、八三七ページ。

(6) 右同書、八三一ページ。

(7) 綾部綱斎の長男富阪宛の書簡。(『梅園全集』下巻所収、七八七ページ)

(8) ポルトガルの宣教師で帰化人、沢野忠庵(Christovão Ferreira)が翻訳をまじえて起草したものを、西吉兵衛が和文に改め、さらに向井元升が批評を加えた共同労作。明暦二年(一六五六)あるいは万治二年(一六五九)に成立したとみられる。——『文明源流叢書』(国書刊行会、大正三年、同覆刻版、名著刊行会、昭和四十四年)第二巻所収、一一八ページ参照。

(9) とくに如見の主著『天文義論』(正徳二年、一七二二)の果たした役割は大きい。だが、梅園がこの書を読んだか否かについては確証をえない。ちなみに、宝暦五年(梅園三十三歳)に記された『浦子手記』によると、この年、西川如見の『和漢変象怪異弁断・天文精要』(正徳五年、一七二五)を読み、抄録していることが見えている。(なお、この『浦子手記』については、後の注④を見よ。)

(10) いわゆる運氣論(五運六氣の説)を理論的背景とする当時の思弁的医学に対して、実験観察の意義を説く「古医方」を興す。この立場は、儒の古学派と方法論的に類似するところありと言われる。良山は、伊藤仁齋の「一元氣論」の影響を受けて、「二氣留滯論」を唱えた。

(11) 実験医学の先駆者。主著『歳志』(宝暦四年、一七五四)は、その著者が死刑囚を解剖し、実地について観察することにより、旧説の誤謬を指摘したもの。なお、同書の宝暦九年刊本二冊が、現在、三浦家に梅園手沢本として所蔵されている。

(12) 「古医方」の完成者で、「万病一辨論」を唱え、旧来の観念的医学に対して実証主義の立場をとった。

(13) 宝暦九年(梅園三十七歳)に記された『浦子手記』に、『大和本草』の抄録が見えている。なお、同書の正徳五年の刊本十冊が、三浦家に梅園手沢本として所蔵されている。

- (14) 宝曆七年の『浦子手記』に、『中庸發揮』の抄録が見えている。なおこのほかに仁斎関係書としては、梅園手沢本のかに、『論語古義』十卷（正徳二年刊）、『古学先生文集』七卷（享保二年刊）、東涯の注釈書として『大学定本釈義』（元文四年刊）、『中庸發揮標釈』二卷（元文五年刊）などを教えるが、梅園がこれらの書をいつ閲読したかについては確証をえない。
- (15) 「多賀墨郷君にこたふる書」（三枝博音編『三浦梅園集』所収、岩波文庫、昭和二十八年）一〇ページ。
- (16) 「天地をしるは、我私の意を入れず、あるまゝに天地に従ひて、天地を師とするにしくはなく候。」（三枝博音編、前掲書、二九ページ参照）
- (17) 右前掲書、一五ページ。
- (18) 『梅園全集』上巻、二七―三二ページ参照。
- (19) この点については、後年になって書かれたものなかにしばしば見えている。たとえば、「晋、垂髻未だ書を読むことを知らざりし前より、疑を天地造化に懐き、時ありては寢食を廢す。既にして書を読むことを知り、之を書に求め、人に接するを得ては之を人に採れども、疑塊融けず。」（『高伯起に復する書』、『梅園全集』上巻、六六四ページ参照）あるいは、「晋は童稚より疑ふこと多し。事に物に触るとき疑はざるなし。殆んど寢食を廢せんとす。歳三十を踰えて、始めて天地に条理あるを悟る。」（『浄門律師に与ふる書』、『梅園全集』下巻、七四六ページ参照、なおこの両書とも原漢文）
- (20) 内容は、和文で「一元氣」から説き起こして、全十二項目にわたって自然哲学的考察を展開している。（阿部隆一編『三浦梅園自筆稿本並旧蔵書解題』安岐町教育委員会、昭和五十四年、三ページ参照）ちなみに、この書が起草された同年（宝曆三年）に、安藤昌益は同じく自然哲学の書『自然真營道』（三巻）を刊行した。
- (21) 右前掲本の改稿にして、書名も改題されている。同じく和文であり、また同じ『宝曆癸酉』になるもの。（阿部隆一編、前掲書、三―四ページ参照。『梅園全集』上巻所収、七四―一六四ページ参照。なお、この全集所収本は、本稿の第三次ないし第四次の改稿本とみられる。）
- (22) 再び書名が改められ、内容も改訂され、またここにおいて和文が漢文に改められる。『垂綸子』と改題されてからの三稿目、すなわち通算第七次改稿本から天地二冊となる。この地冊のみ全集上巻に所収、七二―一三九ページ。この欠を補訂して、天冊は前掲書『大分県史料』(2)先賢資料一所収、一―三〇ページ。この両所収本は、宝曆四年執筆になるもの。

- (23) 梅園は、『玄語』の例旨において(注1)に引用した文章にすく続けて、こう書いている。「……此の語(玄語)は癸酉より、明和乙酉(明和二年、一七六五)に至り、換稿十五。竟に大いに慣々たるを覚え、尽く旧稿を棄てて新に起草す。四年を越えて、戊子(明和五年)に至り、三たび草を換へ、稍々安きが若し。休むこと一年。再び之を思ふに、天地に於て大いに合せず。庚寅(同七年)の冬、又旧稿を棄てて此の稿を起す。又六年を経て、今茲乙未(安永四年)、五たび換へて纔かに此の稿を得たり。四冊七本。例旨を併せて凡そ八本、十余万言。一百六十有余園。歴年二十三、換稿も亦二十三物大に事衆し。犬馬の齒、既に半百を過ぎ、鬢髮嘩々、加ふるに心胸の病を以てす。知らず、天之に年を假し、將に其の業を卒へしめんとするか、將に其の志を奪はんとするか。是に於て感なきこと能はず。書して以て侘日を竣つ。安永四年端午識す。」(『梅園全集』上巻、一六ページ参照)
- (24) 田口正治「玄語稿本之研究」(同著『三浦梅園の研究』所収、創文社、昭和五十三年)一五三ページ参照。
- (25) 現在、三浦家に、『浦子手記』と命名された総計六十七冊に及ぶ梅園自筆の手控えが残されている。延享元年(一七四四)梅園二十二歳のときから、天明五年(一七八五)六十三歳にいたるまでの梅園の生涯をつうじての読書抄録である。この手記は、梅園の思想の変遷ないしその出処を知るうえに貴重である。(田口正治、前掲書所収、四四七―四五九ページ、あるいは阿部隆一編、前掲書、八六―九八ページ参照)
- (26) 二巻図一卷、游子六著西川正休訓点(享保十五年刊)の版本が、三浦家に梅園手沢本として所蔵されている。なお、この書は、まずその冒頭に「昊天(天)一氣渾淪變化図」が掲げられ、「天は渾淪たる一氣なり……万化皆一氣に由る」云々の言葉ではじまる。さらに巻頭に収められた「天経或問引用書目」は、おそらくこの書を手にした当時の若き哲学者にとつては、新たに開けつつある世界を展望するうえにきわめて有益であつたであらう。
- (27) 八巻、明張九韶編、万治二年の和刻本八冊が、三浦家に同じく梅園手沢本として所蔵されている。なお、この書には、張横渠(一〇二〇―七七)の言説が多数収録されているところから判断するのに、若き梅園が、この書をつうじて、張載の宇宙論―すなわち、氣(太虚)の一元論哲学―を知りえたことは確実とみられる。
- (28) 全十二巻からなるが、ちなみにその内訳をみると、つぎのようである。自序・総論、卷一 天類(氣・光・声・律・五行論)、曆類、卷二 風雷雨暘類・地類・占候類、卷三 人身類、卷四 医薬類(上)、卷五 医薬類(下)、卷六 飲食類・衣服類、卷七 金石類、卷八 器用類、卷九 草木類(上)、卷十 草木類(下)・鳥獸類(上)、卷十一 鳥獸類(下)、

卷十二 鬼神方術類、異事類。この書は、当時日本では、ほとんどが写本で読まれ、ついに刻本として流布するところまでにはいたらなかったようである。それは、ちょうど当時評判の高かった明呉廷翰の『吉齋漫録』の場合も同様である。なお、安永八年(梅園五十七歳)に記された『浦子手記』に、『物理小識』を讀み抄録していることが見えている。しかしながら、梅園が『贅語』のなかでこの文献をきわめて頻繁に引用していることから察するのには、梅園は、おそらく相当早い時期にこの文献に注目し、かつ閲読していたものと考えられる。

(30) 『梅園全集』上巻、七四一ページ。なお、三枝博音編『日本科学古典全書』第一巻所収(朝日新聞社、昭和十九年、同覆刻版、昭和五十三年)七九二ページ参照。「…」の部分は、稿本の損傷はなはだしく判読しがたいところ。

(31) 張載は『正蒙』のなかで、こう書いている。「氣は太虚に塊然として升降飛揚し、未だ嘗て止息せず。…此れ虚実動靜の機、陰陽剛柔の始にして、(その)浮んで上る者は陽の清きもの、降って下る者は陰の濁れるものなり。其の感遇聚散して風雨と為り雪霜と為り、…」(『太極図説・通書・西銘・正蒙』西晋一郎他訳註、岩波文庫、昭和十三年、八六ページ参照)

(32) 方以智『物理小識』自序。(同書、人人文庫、台湾商務印書館、民国六十七年)

(33) 『梅園全集』上巻、七四一ページ。なお、この点に関連するものとして、つぎの安藤昌益(一七〇三—一七六二)の言葉は、注目に値しよう。「転定(天地)にして一体、男女にして一人、是れ自然の進退する一氣なり。男を去れば女なく、女を去れば男なく、男女合して一人なる則は人倫常なり。」(『統道真伝』奈良本辰也訳注、岩波文庫、昭和四二年、下巻、一五九ページ)ここでとくに注目すべきことは、安藤昌益が、ひとの概念を表現するのに「男・女」という造語を用いていることだ。というのも、安藤の考えによれば、男女は、対にして人間であることとみられるからである。同様にして、(転定) (天地)も天地にして同一実体であるとみられることになる。

(34) 『梅園全集』上巻、七四三ページ。

(35) 右同書、七四五ページ。ちなみに、安藤昌益は、こう述べている。「陰陽と云ふは、一氣の進退する異号にして、二氣・二物・二別に非ず。」(尾藤正英校注「稿本・自然真営道(抄)」、日本思想大系45『安藤昌益他』所収、岩波書店、昭和五十二年、一八一ページ参照)

(36) 『梅園全集』上巻、七四七ページ。